

研究報告

## 日本の電子音楽のデータベースについて THE DATABASE OF JAPANESE ELECTRONIC MUSIC

川崎 弘二  
Koji Kawasaki  
無所属  
freelance

### 概要

1997年以降、筆者は日本の電子音楽についての調査を続けており、その成果として2006年に書籍「日本の電子音楽」(愛育社)を、2009年にはその増補改訂版を上梓した。プライベートな立場から、筆者が日本の電子音楽についてのデータベースを作成してきた経緯について概説する。

### 1. データベースの領域

日本における近代・現代音楽を対象としたアーカイブとして、明治学院大学図書館附属日本近代音楽館が最も充実したものの一つとして挙げられる。同館のウェブサイトには主な収蔵資料として、(1) 図書、雑誌、楽譜、録音資料などの出版物、(2) 作曲家の自筆譜や初版譜、原稿などの関係資料、(3) 館外所在の自筆譜などを収めたマイクロフィルム、(4) 演奏会のプログラム、が示されている<sup>1</sup>。また、日本の美術分野においては、幅広い芸術の分野に携わってきた人々にインタビューを行い、口述史料として収集・保存する日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイブという団体がある<sup>2</sup>。同アーカイブはインタビューの文字起こしをウェブサイトにて多数公開している。筆者も日本近代音楽館における(1)、(4)の領域の調査、ならびに作曲家などへのインタビューを行ってきており、こうした活動の結果が筆者の取り組んできた狭義のデータベースということになる。さらにデータベースの活用例として、これらの資料を基礎にした解説的な文章の執筆や書籍の出版、コンサートの企画などもこれまでに実践してきている。

### 2. 出版物、演奏会のプログラム

2009年に上梓した書籍「日本の電子音楽 増補改訂版」では、巻末に「日本の電子音楽 主要文献」として日本の電子音楽に関わりがある1,867件の文献を掲載した。ただ、「音楽芸術」誌のみは戦後に刊行された全頁を対象とした網羅的な調査を行ったが、それ以外の長期的な刊行物に対しては全体的な調査は行っておらず、さらに文献の選択の基準はあくまで筆者の主観的な判断によるものである。また、「日本の電子音楽 増補改訂版」では、「日本の電子音楽 主要ディスク」として延べ472枚のレコードやCDを掲載した。演奏会プログラムそのものについてのリスト化は行っていないが、重要と思われる解説文などの記載がプログラムにあった場合は、適宜文献リストへの登録を行った。

現状での問題点として、筆者による恣意的な判断により、テキストベースでの文献やディスクのリスト化が行われているに過ぎず、系統だった調査がなされていないことが挙げられる。また、現時点で未着手の演奏会プログラムのリスト化とは、時系列的なコンサートのデータベースを作成することとほぼ同義であるものと考えられる。「日本の電子音楽 増補改訂版」では、電子音楽を扱ったシンポジウムや学会発表などのデータは場合によって註に記載されている程度であるが、こうしたイベントをも包含した時系列的なデータベースを作成することにより、こうした問題は解決できるものと考えている。

### 3. インタビュー

筆者は2000年から断続的に日本の電子音楽に関わりのある方々へのインタビューを行い、「日本の電子音楽 増補改訂版」では、作曲家を中心に、音響技師、演奏家、映画監督などを含む合計42名の方々へのインタビューを掲載した。同書の約半分を占める550頁に及ぶイン

<sup>1</sup> <http://www.meijigakuin.ac.jp/tosho/news/110520ongakukan.html> (2012年7月2日にアクセス)

<sup>2</sup> <http://www.oralarthistory.org/> (2012年7月2日にアクセス)

タビューは 60 万字弱の文字数となった。インタビューはその後も継続しており、新たなインタビューへの取材や、特定の作曲家に対する複数回のインタビューも行っている。2012 年 7 月までに筆者は 56 名のインタビューに対して計 86 回のインタビューを実施し、その音声録音は合計 215 時間に及んでいる。

日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイヴの代表である加治屋健司が、「情報の質的・量的充実、権力の分散性、発話行為の事実性」[2] がオーラル・ヒストリーの特徴であると述べているように、文字資料ではカバーし得ない領域へのアプローチとして、作家の創作の軌跡をインタビューによって残すことは重要な作業であると筆者は考えている。ただ、これまでのインタビューにより得られた音声録音は、あくまで文字原稿としてのインタビューを作成するための素材であり、外部に公開できるものではない。今後の課題として、作曲家や音響技師に対して、公開を前提としたビデオインタビューの制作に取り組むことも必要なのではないかと考えている。

#### 4. 作品リスト

上記した調査を経て、「日本の電子音楽 増補改訂版」には「日本の電子音楽 主要作品」という電子音楽の作品リストを掲載した。1926 年から 2009 年までに日本人によって、あるいは日本において作曲された、何らかの電気／電子的操作が援用された 1,233 曲の作品をリスト化した。リストには、作品名（邦題と外国語の題名）、作曲家、編成、演奏時間、トラック数、関与した作家（音楽詩劇における脚本家など）、スタジオ名、スタッフ名、演奏者（テープ素材の演奏者など）、初演データ、再演データ、備考（芸術祭などへの参加、楽譜の出版の有無など）といった情報を、調査できた範囲で詳細に記載するように努めた。

現状での問題点として、リストに取り上げる作品の選択が恣意的であることが最も大きなものとして挙げられる。ポピュラー音楽の領域におけるシンセサイザー音楽が扱われておらず、とくに 1980 年代以降のコンピュータ音楽があまり取り上げられていないといった指摘や、そもそも「日本の電子音楽 増補改訂版」には、電子音楽とは何か、という定義がなされていないという批判なども筆者は受けている。ただ、ホアキン・M・ベニテズが「電子音楽は、今日では何らかの電子的手段を用いて実現される音楽を漠然と意味する言葉として使われている」[1] と述べているように、筆者も電子音楽を正確に定義するのは不可能であると考えている。そのため、筆者は作品単位ではなく、作曲家単位で総合的な作品リストを作成すれば線引きの問題をある程度までは解決できると考え、これまでに作曲家のチェックを経た総合的な作品リストを 2 名の作曲家に対して作成している。

#### 5. 書籍の出版、コンサートなどの開催

出版物、演奏会のプログラムといった紙ベースの資料、そして、インタビューや作品リストといったテキストベースの資料を活用した例として、「日本の電子音楽 増補改訂版」に掲載した「日本の電子音楽」という解説的な文章および評論家による論文、そして「日本の電子音楽 年代記」というクロニクルがある。とくに後者のクロニクルは文献のパッチワークにより歴史を記述するという試みであり、特定の分野の音楽史を俯瞰的に捉えるという目的を持っている。すなわち、解説的文章や論文といった要素を加えた上で、インタビューを含む調査結果としてのデータベースを公開したものが書籍「日本の電子音楽」ということになる。その後、筆者は基本的には同じスタンスで「黛敏郎の電子音楽」と「篠原眞の電子音楽」という 2 冊の書籍を刊行し、「武満徹の電子音楽」という解説的文章を雑誌「アルテス」（アルテスパブリッシング）にて連載している。

データベースの活用のもう一つの例として、筆者は 2006 年に「日本の電子音楽」の旧版を刊行して以来、さまざまな機会にレクチャーやシンポジウムなどへお招きいただく機会があり、日本の電子音楽に関わる領域についての口頭発表を行ってきた。さらに、2011 年からは京都の音楽団体 JCMR KYOTO と共同で、現存する黛敏郎の電子音楽を全て上演するコンサートや、有馬純寿らと共同で篠原眞のテープ音楽を全曲演奏するコンサートなどを企画してきている。黛敏郎のコンサートでは残念ながらマスターテープに近いメディアにアクセスすることは絶望的な状態であったが、篠原眞のコンサートではオランダのソノロジー研究所に保管されているマスターテープからデジタル化した素材を入手することができ、NHK で制作されたテープ音楽も作曲家所蔵の状態のよいオープンリールからのデジタル化を行うことができた。期せずして電子音楽作品そのもののアーカイブの一端に関わることになったわけであるが、こうした作業もマスターテープの劣化などの問題を考慮して積極的に着手して行く必要があるものと考えている。

#### 6. 参考文献

- [1] Joaquim M. Benitez. 現代音楽を読む, p145. 朝日出版社, 東京, 1981.
- [2] 加治屋健司 “日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイヴと美術史料の将来”, あいだ 170 号, p9, 2010.

## 7. 著者プロフィール

### 川崎 弘二 (Koji KAWASAKI)

1970 年生まれ。2006 年に「日本の電子音楽」(愛育社)、2009 年に同書の増補改訂版、2011 年に「黛敏郎の電子音楽」(engine books)」、2012 年に「篠原眞の電子音楽」(engine books)」を上梓。<http://koji.music.coocan.jp/>